

警告の侍女

アマンダ

カーティスの婚約者である侯爵令嬢。
クルクルごてごてなお嬢様。

カーティス

ルーベニア王国第一王子。
他人の前では王子スマイルをふりまくが大抵は不機嫌。破顔する唯一の相手がエディス。

エディス

第一王妃宮の侍女として務める少女。
分をわきまえた真面目タイプだが、冷めた顔で言うことはズバズバ言うことも。



ジェレミー

ルーベニア王国第二王子。
人当たりのよさそうな好
青年。

マジェリー

ジェレミーの婚約者で
ある公爵令嬢。
大人しくつましやか
な才女で知識に食欲。

メレディス

ルーベニア王国第二王妃。
ジェレミーの母。
一番でないと気が済まない
性格で、リディアとカー
ティスを目の敵にしている。

リディア

ルーベニア王国第一王妃。
カーティスとクレアの母。
いつも朗らかで優しい大
人な女性。

クレア

お転婆で甘やかされて
育った王女様。好奇心
旺盛だが、ちょっとわ
がままなところも。

 contents

プロローグ	006
第一章 二人の王子の誕生日	008
第二章 侍女募集	020
誕生日 カーティス十三歳	032
第三章 カーティスの進学	034
誕生日 カーティス十四歳	057
第四章 婚約者達の事情	059
誕生日 カーティス十五歳	080
第五章 偵察、学校生活	081
誕生日 カーティス十六歳	103
第六章 婚約者の変更	105
誕生日 カーティス十七歳	110
第七章 エディスの婚約者	116
第八章 捕らわれの偽侯爵令嬢	130
第九章 それぞれの「事件」	141
第十章 侍女失格	153
第十一章 夜会の招待状	172
第十二章 王妃の占い	184
第十三章 アマンダの恋	201
第十四章 ……我慢?	217
第十五章 王太子	222
誕生日 カーティス十八歳	233
第十六章 傾国の王	244
第××章 種なき世界	249
エピローグ 誕生日	259
Additional Story 1 侍女エディス	262
Additional Story 2 記念金貨	288

プロローグ

ルーベニア王国の北西にある小さなスタンレー領。

子爵一家が去年亡くなった子爵夫人の墓参りを終えた時からポツリ、ポツリと降り始めた雨は、時折雷を伴って土砂降りとなった。よくある通り雨だと思われたが、翌日になっても止むことはなかった。風と共に流れて来る雨雲は途切れることなく、時に激しく三日間降り続き、普段は穏やかな流れのテーベ川は日に日に水量を増していった。川は流れ込む雨を受け止められず、川に近い家屋や畑は濁流に吞まれていった。

長く領に住む者も、これほどまでの大雨は見たことがないと言った。

あちこちで崖崩れが発生し、流木が橋げたに絡まり、石造りの橋は水圧に耐えきれず崩壊した。早期に避難を促したが、何人か行方不明になった者もいた。雨が止んだ後も川の水嵩はなかなか落ち着かず、普段通りの流れになるのには数日を要した。

水が引いた後には流木や泥が残った。家屋を失った者は多く、農作物の被害も甚大だった。

王都への道は寸断され、交通の要所として潤っていた街は収入源を失った。

まずは人々の生活を守ることに。

領主であるスタンレー子爵は食料確保に努め、領内での工面で足りない分を近隣の領から買い受

けた。中には相場の二倍近い価格を吹っかけてくる者もいたが、状況が落ち着くまでは言い値で買
い付けた。

街の復興には、どうしても街道の復旧が欠かせない。

雨に弱さを見せたこの街道の信頼を取り戻し、同時に長年の懸案だった洪滞の解決を図る。

スタンレー子爵は崖崩れの起こった個所を念入りに修繕し、流された橋の跡地にこれまでの倍の
広さの橋を建設することにした。今までの橋は馬車がすれ違うことができず、避暑地へ行き交う
シーズンにはしばしば洪滞を起こしていた。どうせ作り直すなら、譲り合わなくとも馬車が通り抜
けられる橋でなければ。

スタンレー領は決して貧しくはなかったが、飛びぬけて財がある訳でもなかった。住民の支援、
街の復興、そして一見贅沢ぜいたくな新しい橋の建設であつという間に蓄えは底をつき、気が付けば借金は
莫大な金額になっていた。

道は所々閉ざされたまま。領民の生活は苦しく、被害のあつた地域は税を徴収できる状況ではな
かった。利息の取り立てに金貸しが屋敷を訪れるようになったが、一年目は家財を売り、何とか凌しの
いだ。

しかしこの先、翌年の保証は何もなかった。

第一章 二人の王子の誕生会

今年もルーベニア王国の二人の王子の誕生会が開催されることになった。例年であれば、伯爵家以上の子女だけが招待されるのだが、今回は王国にいる貴族の子女のうち年齢の近い者があまねく招かれた。

二人の王子は年は一つ離れていたが同じ月に生まれていたので、誕生会は毎年合同で行われている。パーティー好きの貴族であっても、ほんの一週間しか変わらない王子の誕生会が別に開催されれば準備だけでも大変で、どちらかにしか参加できない者も出てくるだろう。そうなると王子の人氣を測ることになり、今後の国政にも影響を及ぼすことになる。

たかが誕生会、されど誕生会。主催者も招かれる側も対応を誤ることは許されないのだ。

今年の「みなんでお祝いしてね」な誕生会も合同開催だった。

父から渡された招待状によると、父兄の同行は不要。プレゼントも不要。気軽に来るように、と書かれながらも特に令嬢は欠席のないように、と付け加えられていた。

王家からのご招待だ。この国の貴族である以上、よほどの事情がない限り拒否権はない。さらに「令嬢は」という注意書きがこのパーティーが特別な意味を持っていることを想像させた。張り切

る家も多いだろう。

エデイスもまた父に言われるままパーティーに参加することになったが、貧乏子爵家に贅沢する余裕などなく、張り切る気になどなる訳がない。

「参加すれば不敬にはならないんでしょ？ 適当にやっておくから」

そう言つて、父が無理して工面した金には手を付けないようにした。

母のお古のドレスを探し、侍女と一緒に自分の背丈に合うように縫い直した。かつてはオフホワイトなんて洒落た名がついたかもしれないその色は、どう見ても経年劣化で黄ばんでいる。

母の形見のネックレス。宝石箱の中身はかつての半分も残っていない。父はできるだけ手を付けないよう頑張っているようだが、これも来年には小麦に変わるかもしれない。溜め息をつきながら、最後のお披露目の機会を持ててこの石も喜んでいるだろう、と思うことにした。自分は全く喜べる状態ではなかったが……。

手袋とストッキングは、去年伯母からいただいたものがあつた。成長期とはいえ、まだまだ入る。いところから譲ってもらったコルセットは自分にはまだ少し大きく、絞めたところでさほど締まった気はしないが、ないよりでした。

当日、じいやに御してもらつて久々に動かした家の馬車はひどくがたついていて、着く前に吐しゃ物でドレスを汚せばそのまま帰宅となる危険性もあつた。

同行する侍女も侍従もない。万年人手不足の家だ。言い出しにくそうにしているじいやに先に、「送ってくればいいから」

と言うと、

「申し訳ない」

とよよと泣いていた。じいやこそ、この振動で腰をやられないか心配だった。

じいやが馭者台から降りるのを待つか、自分で降りるしかないだろうな、と思っていたが、車寄せに待機していた侍従らしき男がドアを開け、手を差し伸べてくれた。子供だけの参加となっている今日はこういう客も結構いるのかもしれない。

さすがに侍女も連れていないケースはレアだったのだろう。馬車の中を軽く覗き込み、エデイス以外誰も乗っていないことを二度見して、哀れむような表情を浮かべたが、何も言わずにドアを閉めた。侍従たるもの、客に恥をかかせては二流だ。

まあ合格、とエデイスは軽く礼をして、かつて祖母が使っていた、もう匂いもしない香木でできた扇子を口元に当てて微笑んだ。

「どうぞ、ご自由にご歓談ください」

会場となっている庭園に案内すると、侍従はいなくなった。

すぐに体つきの変わる子供にドレスをホイホイと準備できるのは、上位貴族か、羽振りの良い家。

しかし今回は王子達の婚約者、つまりは将来の王妃を選ぶ場も兼ねているのは暗黙の了解で、令嬢のいる家はどこも砂漠の砂粒ほどの可能性をかけてそれなりにめかし込んで参加していた。

しかし、財力の差を埋めるのは容易ではない。美しく着飾った令嬢・令息が王族のいる上座に集まり、それはいつも招待される面々とはば変わりなかった。

そしてエデイスがそこに加わることはない。

王への挨拶のために並ぶ列はなく、誰も王からの呼び出しを受けることもない。練習した挨拶も不要だった。

中央のテーブルに置かれた、五段重ねのどでかいケーキ。ここにいる全員で分けるなら食べきれぬだろうが、無駄な大きさと、象徴的な飾りに過ぎない。

軽食にスイーツに果物。どのテーブルにも見た目も麗しく、味も麗しそうな食べ物が置かれている。エデイスは会場の一審端に用意されたテーブルに向かい、さつきまで馬車に酔いかけていたことも忘れてその上にある食べ物を端から順番に皿に盛り、さすが王家主催、と減多に味わえない最高級の味を堪能した。

エデイスの周囲には、同じくきらびやかな面々とは交じり合うことのできない家格の子女達が、それぞれ見知った友人を見つけて会話を楽しみ、友人を通して新たな縁を結んでいた。中には走り回っているやんちゃな子供もいて、家令が必死に止めている。

エデイスもまた数人の知り合いに挨拶はしたが、目下没落寸前のスタンレー家と仲良くしようと

する者はおらず、話の輪に入ることも自ら遠慮した。

王様も罪なパーティーをするもんだなあ……。

パーティーへの出席は、貴族に散財させることが目的だとしても、斜陽の家には追い打ちをかけるものだ。

一昨年の大雨で領内の崖が崩れ、橋も流された。スタンレー家の領と王都をつなぐ道は長い間行き来することができなくなり、どこへ行くにも大回りを余儀なくされた。

その道は王国の北にある湖周辺の避暑地へ向かう最短ルートでもあり、道沿いにあった街はそれなりに賑わっていたが、水害以降人の流れは途絶え、商売をやめ、領を離れる者も少なくなかった。道が本格的に復旧したのはついこの間。橋は通れるようにはなったものの、全面開通にはもう少しかかる。ここからどれくらい盛り返せるのか……。安全第一と周辺の補強も怠らず、橋は馬車が横に二台通れる幅に広げ、かなり金をかけて再建したせいで、領の収支は真っ赤っか。領主であるスタンレー家もしかり。盛り返すのが早いか、破産するのが早いか……。

末席からでは今日の主役を見ることもないだろう。それなら花でも愛でるか、とエデイスは珍しい花が咲き誇る庭園を散策して時間を潰し、帰るタイミングを計っていると、ふと人の気配がした。庭園の奥にあるガゼボの裏手、隠れるようにしゃがみ込んでいるその人は、自分とさほど年が変

わからないように見えたが、その身なりからしてただ者ではないだろうことは察せられた。

目と目が合ったが、すぐにそらせ、何も気付かなかったそぶりで周りの花に手を伸ばし、

「さすが、手入れが行き届いているわ」

などとわざとらしい独り言などつぶやいてみた。

そのまま何も見なかった態ていでくると向きを変え、そつと立ち去ろうとすると、

「おまえも王子を見に来たのか」

と声をかけてきた。

せっかく人が気が付かないふりをしているのに向こうから話しかけてこようとは。暇だったのだろうか。

「まあ、……招待されれば、見るくらいはしといた方がいいんですけど、あれだけ高貴な方々が周りにたかってたら無理でしょうね」

「たかって……」

くくつと漏れ出す笑い声をして、思わず声の主の方を向きそうになったが、自分の視線のせいで他の人に見つかってもよくないかと思ひ、あくまで気づいていないふりを装い、花から目をそらさなかった。

「何のために国中の貴族の子供を呼んだんでしょうね」

「二人の王子の婚約者を選ぶんだ」

噂通りの答えに、なるほど、とエデイスは思った。

「……広く募りました、という口実にはなりますね。出来試合でも」

「出来試合。……何故そう思う」

「王家の方々の周りにいるのは、いつもいらっしやる方ばかりでしょう？ 本気で下位貴族の令嬢を含めて広く見極める気があるなら、会場を周遊されるか、順番にお呼び出しがかかるはずですよ。それをしないということは、もう既にお相手は決まっているのではないかと」

会場は広く、いつも以上に集まっているちびっこ貴族。

王族は同じ場所にいて、周辺にいる人だけを相手にしている状況は、ここに来てからずっと変わっていない。

末席から少しづつ人がいなくなっている。つまり、みんな期待は妄想だったとわかってきたのだ。自分もそろそろいい頃合いかな、とエデイスは退席のため庭から出ることにした。

「……おまえ、名は何という」

「ご自身も名乗る覚悟でしたら答えますけど？」

こんな所に隠れているくらいだ。どうせ答えはしないだろう、と高をくくり、エデイスは一人て花を見ていたそぶりを崩すことなく、挨拶もせずとその場を離れようとした。

「……カーティスだ」

その名を聞いて、さすがに足が止まった。

あの人だかりの中央にいるはずの、今日の主役の一人。カーティス王子。

振り返ってはいけない。こんな所にいる理由はわからないながらも、下手に関わって隠伏^{いんぷく}の手助けをしたとでも思われたら面倒だ。

「……空耳かしら」

わざとらしく宙を眺め、再び足を動かした時、急に近寄ってきたカーティスに腕をつかまれ、驚きのあまり振り返ってしまった。

「俺は名乗ったぞ。おまえも名乗れ」

王子らしい高飛車な態度に、エデイスは顔をしかめた。

カーティス王子は自分より一つ年下と聞いている。自分より小さい十一歳の小生意気な王子。今日の主役であり、みんなからもてはやされる身でありながら隠れるような奴に腕をつかまれているのが何となくカチンときて、名乗るよりも先に、

「王子がこのような場所で何をしているのでしょうか」

と非難を込めて意見してしまった。

当然、カーティスの顔色も変わった。

「ご自身のためのパーティーでしょう。これだけの会を開くのにとれだけのお金が費やされているか。全く……、中央のあのどでかいケーキだけでも一つの村の住人全員にパンを配っても余りあるでしょうに。自分が祝ってもらえる立場の人間であることをわきまえ、集まった人々にもっと感謝

すべきでは？」

「祝いなど……。俺がいなくても、弟のために同じ祝宴を開いているさ」

思いがけない弱音を聞いて、エデイスはカーティスに軽くデコピンをした。

驚いて手を離れたのを見て、くすつと笑うと、

「お誕生日、おめでとうございます、殿下」

今日、王との挨拶に備えて練習した礼を、目の前にいる主役に披露した。

「……と言っても、先週でしたっけね、殿下のお誕生日は。日程を弟に合わせ^すたからって、拗^すねてちゃダメですよ」

からかうつもりで言った言葉が、意外と的を射ていたのかもしれない。カーティスは顔を赤らめ、恥ずかしそうに小声でつぶやいた。

「べ、べつに、拗^すねてなんか……。何で俺の誕生日を知ってる」

「私の母の誕生日と同じなんです」

たまたま身内の誕生日と一緒だった。だから覚えていただけだ。簡単なネタばらしをしているうちに、エデイスは亡き母を思い出して、少しだけ寂しくなった。

「……もうお祝いできませんか。祝ってもらえるのも、祝ってあげられるのも、生きていればこそですからね。では」

小さく礼をして立ち去ろうとするエデイスに、カーティスはもう一度手を伸ばし、手首をつかん

だ。そして驚くエデイスを引つ張るように先導して、自ら人々の集まるパーティー会場の方へと歩みを進めた。

ちよつと待て。今日の主役の王子に連れられて会場に向かうなど、目立ち過ぎる。

そうは思つても、カーティスは手を緩めることなく、少し早足で、慣れないドレスと合わない靴ではついて行くのがやっとだった。

エデイスの歩みがおぼつかないのに気が付いたカーティスは歩く速度を緩め、手首をつかむ手を緩めてするりと掌をつかんだ。握られた手の大きさは大して変わらなかった。

「もう一度聞く。名は」

これ以上はごまかせないと思つたエデイスは覚悟を決めた。一呼吸おいて自分の名を名乗ろうとしたが、散々生意氣を言つた後だ。正体を明かす緊張感からか、

「……え、エデイス、……スタンレーでございませしゅ」

思いつきり噛んでしまった。

ぷつと、カーティスが吹き出す音がした。声を抑えてはいたが、湧き出る笑いを止めることはできないように、これ見よがしに笑われてエデイスは恥ずかしさに思わずプイツと顔を背けた。カーティスはわざと覗き込むように回り込んで、にやにやと意地悪な笑いを見せた後、満足げに微笑んだ。

「スタンレー子爵の令嬢か。……二度も笑わせてもらった。いい誕生祝いだつた」



会場が近づく、人目につく前に手を離された。ほっとしたエデイスは、

「ありがとうございました。おかげさまで会場に戻れました」

と、周囲に自分は迷っていたのだとアピールし、深く礼をした。

目の前のカーティスは、さっきまでの表情とは違う、一見優しげでありながら隙のない笑顔を向け、立ち姿もりりしく、

「気を付けて」

と言った。そして去り際に小さな声で、

「じゃあな、『ごじやいましゅ』」

とつぶやき、エデイスが怒りを抑えながらも顔を引きつらせるのを見て、一瞬、意地悪で生き生きとした笑みを見せた。

噂通り、その日のうちに二人の王子には婚約者が決まったらしい。会場でお相手の名がお披露目されたが、それはエデイスが会場から去った後だった。

もしかしたら、カーティス王子は婚約発表から逃れるため、あの人気のないガゼボの裏手に隠れていたのかもしれない。まあ、到底逃げきれとは思えないが。

見つけてしまったて悪かったかなと思いつても、もう会うこともないだろう王子の幸せを祈りつつ、今日も侍女やメイドに混じって家の仕事に励み、父や兄の手助けに務めるのだった。

第二章 侍女募集

あの誕生会から一年。次の誕生会は子爵家に招待状が届くようなことはなく、スタンレー家では家族一同ほっとしていた。王城で出された食べ物はいいかつたが、準備にかかる手間・暇・金を考えるとお得感はなく、気疲れしただけ。忙しい毎日にあんな出来試合の婚約者内定会ごっこなど思い出すことはなかった。

スタンレー家はまだ借金の渦の中にあつた。道が全面開通したことで人の流れができ、旅の途中の休憩地として街は活気を取り戻しつつあつたものの、なかなか借金はなくならない。たつぷり借りるとたつぷり利息が取られ、元金は一向に減らない。国から水害復興の助成金が出ると聞き、申請してはみたが、当てにできるかどうかはわからない。借金慣れしていないスタンレー家にとってトンネルの出口はまだ見えていなかった。

エデイスはその年に行くはずだった王立学校への進学を諦めた。父と兄は惜しんでくれたが、進学して金を使うよりもっといい話が湧いてきたのだ。

それは、王城の侍女募集。貴族の子女が行儀見習いを兼ねて応募することの多い人気職だ。高貴な家では女性の労働は厭^{いと}われがちだが、王城に務めるエリート文官や騎士に見初められ、悠々自適な人生を狙う者も少なくない。エデイスもそんな妄想を少しは抱かないでもないが、それよりも現

実的に高賃金、福利厚生の実に魅かれていた。住み込み勤務だが個室が与えられ、城内には侍医もいる。お仕着せは上質で上品。食事は三食提供で時におやつが振る舞われることもあるらしい。

実は借金肩代わりと引き換えにエデイスに縁談が数件来ていたが、四十、五十を超えた男の後妻や第二夫人など条件の良くない話ばかりで、父はエデイスに話をするまでもなく断りを入れていた。そんな父も王城勤務であれば、と申し込みを認めてくれ、運よく採用となった。借金まみれでも真面目に納税している子爵家の懐具合を知り、優遇してくれたのかもしれないとは兄のアルバートの談だ。それなら税もまけてくれると嬉しいのだが。

その年採用されたのは五人。うち三人は王立学校を卒業したての者で、エデイスは最年少だった。まずは侍女見習いとして半年間。その働きを見て継続雇用とするかどうか決定すると言われた。

エデイスはリディア妃の住む第一王妃宮に配属となり、ベテランの侍女から仕事を学んだ。

第一王妃リディアと第二王妃メレデイスは險悪ではないものの、さほど仲がいい訳ではなかった。メレデイスの生家ウォルジー公爵家は歴代何人もの宰相を生み出してきた家柄で、政治的影響力が圧倒的に強かった。リディアは第一とは名ばかりで、いつも控えめに目立たないように過ごしていた、国の行事にも病弱という名目で参加を控え、王の隣にはいつもメレデイスが当然のように座っていた。

実際には健康面に全く問題はなく、リディアは今の立場を受け入れていて、花を育てたり、音楽、刺繡しゅう、占いといった趣味に精を出し、王妃としての「面倒」な仕事を「引き受けて」くれるありがたーいお方として、メレデイスを重宝……、いや一目置いているようだった。

適材適所。ある意味、このリディア妃もしたたかな方である。

二人の王子の婚約者として選ばれたのは、カーティス第一王子にはアマンダ・クライトン侯爵令嬢。ジェレミー第二王子にはマジェリー・ブラッドバーン公爵令嬢。出来試合だけあって、兩人ともそれなりの家格だった。思い返せば、王家に嫁ぐ人材をあのようなパーティーの場でほしいと見つけられると思う方が不自然だ。家格はもちろん、財力も派閥も人間関係もじっくりと調べ上げたうえでの選定だろう。

カーティスは第一王妃リディアの子供、ジェレミーは第二王妃メレデイスの子供だった。第二王子に公爵家の令嬢があてがわれているのは、第二王妃が政治力でものを言わせたのではないかもっぱらの噂だ。

婚約者となった二人は定期的に王城に上がり、そろって王妃教育を受けていた。

王妃教育を担当するのは第二王妃で、第二王妃宮へ出向き、二人並んで講義を受ける。第一王子の婚約者であるアマンダにとって、第二王妃宮にはマジェリーほど行き慣れておらず、周りも知ら

ない侍女・侍従ばかりで落ち着かない様子だった。そのため年の近いエデイスがアマンダに同行し、後ろに控えることになった。

「この国には大きな川が二つあります。一つは北東から南に流れるオルターナ川。もう一つが北から南西へ向けて流れるターベ川。オルターナ川はここ王都の水源でもあり、王都への水路が作られたのは、……マジエリー嬢」

「アラスター王が建設に着手し、完成したのはアラスター二世の御代^{みよ}でした」

「その通りです。マジエリー嬢、よくおわかりですね。先代の王達のおかげで、私達は王都で自由なく水を利用することができなのです」

さらりと答えるマジエリー。褒められても軽く礼をする程度で実にスマートだ。マジエリーにとっては常識程度の知識なのだろう。しかし、隣にいたアマンダは面白くなさそうだ。

「どちらの川も比較的穏やかですが、三年前の大雨では氾濫を起こし、……アマンダ嬢、氾濫を起こしたのはどちらの川でしたか？」

ほんの三年ほど前のことながら、アマンダは言い淀^{よど}み、一か八かといった感じで、

「オルターナ、川？」

と答えたが、残念。

「ターベ川です」

二択を外したアマンダは、恥ずかしそうにうつむいた。自領に関わらない事件など記憶に残らないものなのかもしれない。しかし、エデイスには忘れようもない因縁の災害だ。

「テーベ川の氾濫でオルコット領、スイフト領、スタンレー領など、多くの領が被害に遭いました。その翌年も大雨で東部地域の作物に被害が出て、王は各領の復興を支援されました。今では田畑の修繕、道や橋の再建もほぼ終わっています」

さらりと出てきた自領の名前に、エデイスは三年で過去歴史になるのかと驚いた。確かにその後復興の助成金もいただき、道や橋はほぼ直っている。しかし助成金が出るまでは自腹を切り、その時の借金を今なお払い続けている身としては、いささか「異議あり！」な講義であるが、エデイスはあくまで付き添い。口をはさむことはなかった。

冷静でいて冷たさはなく、判断力もあり聞き上手なマジエリーに対し、おしゃれに関心が高く、おしゃべり好きで好き嫌いが多いアマンダ。共に学んでも理解力に明確な差があり、マジエリーが評価されるほどにアマンダは勉強への意欲をなくしていき、しぶしぶ講義を受けているのは見ているだけでも明らかだった。

爵位と令嬢の質はまた別問題ではあるが、現状では残念ながらアマンダの方が劣勢と言わざるを得なかった。

講義自体は面白いのに集中できないアマンダを見て、エデイスはせっかくタダで勉強できるのに

もつたない、学業なんていつでもできると思つて甘えてるな、と思ひはしたが、余計なことを言つて令嬢の不興を買わないよう、口をしつかりと結んだ。

初めは不安げにしていたアマンダだったが、回を増すごとに不安が不満に変わつていった。お茶の時間に侍女のチエルシーがアマンダに出した飲み物が気に入らないと難癖をつけられ、三十分になつて嫌味を言われた。チエルシーはもう二度とアマンダのお茶出しはしたくないと泣きつき、別の担当に配置替えになつた。

次の担当者が決まるまでエデイスがお茶出しを引き受けたが、幸い機嫌の悪い時ではなかつたよう、侍女が代わつたことにさえ気が付いていないようだった。

お茶を下げる時に、アマンダのいた席から一口かじつただけで放置された焼き菓子を数個見つけ、グルメなものだと思つたものとエデイスは溜め息をつきながら片付けた。



侍女見習い期間が終わると、エデイスは正式に侍女として採用され、そのまま第一王妃宮に残り、リディアの子供であるカーティスの側付きになつた。

同じ宮をうろうろしていたので存在は知られてはいたはずだが、側付きになつた挨拶をしに部屋に

行くと、クールな立ち姿から一転、カーティスはぶっと吹き出し、

「ご……ごじゃいましゅ、だ……」

と懐かしいネタをつぶやいてエデイスを指さし、大笑いした。

いつにない王子の笑いっぷりに周りにいた者達も目を丸くしていたが、言われたエデイスはにこりとせず、よくも覚えていやがったな、と恨みを込めた視線を送った。

王子には既に側近が三人いて、身の回りのことはエデイスがいなくても不足はないようだった。

なので自分には大した仕事は回ってこないだろうと思っていたのだが、お茶出し、着替えの補助はもちろん、物品の管理、スケジュール管理、極秘でなければ書類の扱いも任された。側近のエドガー、イーデン、デリックはエデイスに遠慮なく仕事を振り、時にはエデイスに任せて誰もいなくなることもあった。そこまで信用されるのも少し不安ではあったが、期待を裏切らないよう与えられた仕事を着実にこなすことを心がけた。

一月に一度行われるカーティスと婚約者アマンダの定例のお茶会の世話も、エデイスの仕事になった。

王妃教育の時以上に張り切っておしゃれをしてくるアマンダ。派手な色のドレスを好み、栗色の髪は時にクルクル時にふわふわでドレスと同系色のリボンがつけられている。身につけているアクセサリーは家の財力は示しているが主張が激しく、もう少し控えめな方がドレスに合っているよう

に思え、全体のまとまりは大きく外している訳ではないのだが、とにかく最大限頑張っている感が強かった。

アマンダの好き嫌いは概ね把握しており、エデイスが担当になってからお茶が原因でアマンダが荒れることはなかった。

「殿下、ご機嫌いかが？ 今日このドレスはルドール王国から取り寄せたレースを使っておりますのよ。先日お父様が私のために取り寄せてくださいましたの。お父様はルドールの商会にもお知り合いの方がいるので、最新のものを惜しみなく提供いただけますの。それに……」

今日の装いに関する話からはじまり、家のこと、父親のこと、新しく手に入れたもの、おいしかったお菓子の話まで、自分がいかに大切にされているか、愛されているかを一方的に喋りまくるアマンダ。それを微笑みを崩すことなくただ聞いているカーティスの我慢強さには敬服した。そのほとんどが自慢話で、一時間のお茶会はアマンダの独壇場だった。

退席する時のアマンダはご機嫌で、すっきりとした顔をしていた。

アマンダが帰った後、エデイスがお茶を入れ直すと、死んだように無表情のカーティスが、「……長話が苦痛だって、婚約破棄の理由になるかな」

とつぶやくのを聞き、エデイスは、

「なる訳ありません」

と答えるしかなかった。



二人の王子の誕生会が近づいてきた。王家主催の恒例行事の一つだ。

その年も合同で行われると聞いていたが、第一王妃宮では不思議なほどに何もなかった。侍女仲間のチェルシーに聞くと、

「例年誕生会はメレデイス様が主催されるから、第一王妃宮はお手伝いの要請があれば行くくらいなのよ」

とのことだった。

リディア妃は自分の子供の誕生会でありながらその運営をメレデイスに任せきっていた。第二子であるクレア王女のお世話に忙しいのもあるだろう。リディアは王妃としては珍しく自身で子育てをし、乳母をつけていなかった。

開催日は今年もジェレミーの誕生日。聞けば隔年交代でもなく、これまでも毎年ジェレミーの誕生日に行われているのだそう。運営的には日付が固定されている方が楽なのだろうが、祝われる者にとっては偏ってはいけなところだろう。

第二王妃宮の要請を受けてエデイスも何度か手伝いに行ったが、こちらは半端なく準備に追われ

ていた。国内外から連日祝いの品が運び込まれ、来賓の子供達に配るための「お返し」のプレゼントも用意されている。格の低い家の子供が呼ばれたのはあの二年前の婚約者を決めた時だけで、将来王家を支える上位貴族の子女と交流を図る大事な行事だ。テーブルのセッティングプランも、出されるメニューも、子供達の興味を引くようかわいさが重視されている。

こんなに事前に手間をかけて祝いの準備がなされているのを見れば、祝われる者は自分が愛されている特別な存在だと実感することだろう。

ジェレミー自身は毎年の恒例行事に慣れているようだ。エデイスを含め手伝いに来た第一王妃宮の侍女達に、

「私の誕生日のためにお手伝いありがとう」

とにこやかな笑みを添えて礼を言っていた。侍女達は皆頬を染め、謹んで礼を返した。エデイスも言われて礼をした。しかし、

私の誕生日

その言葉がひっかかった。

侍女にも他の下働きの者にも気を配ることができる、悪くない人だ。

私の誕生日？

いや、そこは「私達の誕生日」でしょう。

「お母様、お誕生日おめでとう！」

自分の家では、その日は家族みんなが笑顔でお祝いをする日だった。

果物が好きな母のために、父は遠方から変わった果物を取り寄せていた。食べたことのない果物は口にするだけで冒険だった。当たれば大喜び、ハズレでも笑って思い出にできた。

酸っぱい果実にみんなで顔をしかめ、大笑いしたあの日。母の笑顔を今でも覚えている。

エデイスは二年前の誕生会でガゼボの裏に座り込んでいたカーティスのことを思い出していた。

平気ぶっているが、カーティスが誕生会を前にして心穏やかでないのは想像がつく。自分も一緒に祝ってもらえる。だけどその日は他の人の誕生日。他の人のために準備された誕生会など……。

エデイスは第一王妃宮に戻るとリディア妃の元を訪れ、自分のちょっとした計画を話し許可を求めた。リディア妃はにっこりと笑って了承し、上質な紙を提供してくれた。

「私にも協力させて。この辺り、空けておいてくれる？」

リディア妃のリクエストを受け、一番上の中央に余白を用意した。

エデイスは非番の日にあえて侍女のお仕着せを着て王城を巡り、協力を求めると、みんな快く引き受けてくれた。

できあがったものをリディア妃に渡すと、その日のうちに戻され、余白はなくなっていた。リディア妃だけでなく、王までもが協力してくれていた。恐れ多いと思いつつも、エデイスは王や王妃もまた父親であり母親であることを嬉しく思った。

そして自分も、紙の隅っこに小さく名を残した。

誕生日 カーティス十三歳

その年も二人の王子の誕生日パーティーは合同で、相変わらず日程は第二王子のジェレミーに寄せられていた。カーティスは今さらどうにかしようという気はなく、早く合同でなくなるか、祝われなくてもいいようになることを願うくらいだった。

ジェレミーがいなければ……。

ふと思い立っただけなのに、心が揺れるのを感じた。

例年パーティーがあるからと、自分の本当の誕生日は母から祝いの言葉をもらう程度で簡単に済まされていたが、今年は食後に小さなケーキが用意され、妹からも「おめでと」と声がかかった。

少し機嫌よく部屋に戻ると、机の上に一枚の紙があった。

そこには、第一王妃宮で働く馴染みの者や仲の良い騎士団の者達から祝いの言葉が一言ずつ書かれていた。

おめでとう
間もなく始まる学生生活が

楽しいものとなるよう願っている

父から添えられた言葉。今日は不在だったが、忙しい中こうして言葉を書き添えてくれるほどには自分のことを気にかけてくれているのだ。

書かれたメッセージは一言でも、みんなが祝ってくれている。自分の本当の誕生日に、自分のことを。

エデイスから書かれていたのは、

おめでとうございます

ちよつとの間だけ同い年ですね

だった。この文でエデイスは一つ年上なことに気が付いた。

後からエデイスが紙を持ってみんなの所を回っていたと聞いて、思わず笑みが漏れた。

お礼を込めて、エデイスの誕生日には侍女頭に頼んで部屋に小さな花束を届けてもらった。誰かからも書かなかった花束は、枯れるまで部屋に飾られていたと聞いた。

第三章 カーティスの進学

エデイスがカーティスの側付きになって一年もしないうちに、カーティスは王立学校に進学することになった。

学校はさほど遠くなく毎日城から通うが、昼間は同い年の側近デリックが同行し、カーティスが学校に行っている間、エデイスが王城ですることは多くなかった。

エドガーとイーデンは平日の昼間は騎士団兼務となり、エデイスもカーティスの妹であるクレア付きの侍女に変わると聞かされていたのだが、何故か引き続きカーティス付きの侍女のままで、昼間だけクレアの侍女の手伝いをするようになった。

クレアは王家唯一の王女で、四歳とまだ幼い。金色の髪は少し癖毛で、王妃譲りの水色の目がエデイスを見てニコッと微笑んだ。

見習い侍女だった頃から、時々クレアのお世話はしていた。

初めて会った頃のクレアのマイブームは「お馬さんごっこ」だった。

誕生日に木馬を与えられ、えらく気に入ったクレアが次に選んだのは、人間木馬だった。四つん這いになった人間にまたがり、

「さあ、行くのよ、ハイヤー、ハイヤー！」

と部屋中を走らせる。若くない侍従は腰を痛め、クレア付きの侍女達は四つん這いを嫌がり、馬役を務めてくれる者がいなかった。

挨拶をすると、ニコッと微笑みながら袖を引っ張られた。その目は新しい馬が来た期待と喜びにあふれていた。

クレアからのご指名もあり、一番若かったエディスは積極的に馬役を命じられた。絨毯じゅうたんがあつてまだ助かったが、侍女のお仕着せは埃ほこりだらけになり、追加で新品のお仕着せを三枚も支給してもらった。

いろいろ試行錯誤し、時にはクレアを紐で体にくくりつけて暴れ馬まで演じ、クレアには大うけではあったが、周りの者は皆クレア王女に何かあったらと気が気でなかった。

二か月もすると人間木馬に飽きてくれてハードな子守りではなくなったが、すっかりクレアに気に入られ、「エディス、来てー！」とご指名で呼び出されることもあった。

カーティス付きになってからは、お世話をする機会も減っていたが、そのエディスが昼間だけとはいえクレアの侍女になったのだ。クレアが喜ばない訳がなかった。土で汚れようと木の上だろうと虫相手だろうと城内を走り回られようと躊躇ちゅうちよすることなくクレアの要望に応えようとするエディスは、クレア付きの侍女から重宝がられ、王女のお気に入りだからと言って嫉妬を向けられるようなこともなかった。



エデイスがカーティス付きのままのパートタイム侍女だということはクレアもわかっていて、

「そんなわがままを言っていると、エデイスが来てくれなくなりますよ」

と言われると、しゅんとなつていい子になろうとする。そんな姿を見るとエデイスにはクレアが妹のように思え、不敬と思われる程度に存分にかわいがつてあげることにした。

夕方になるとクレアの元を離れ、汚れがひどい時はお仕着せを着替えてからカーティスが戻る頃合いを見計らつて玄関で待機した。

カーティスが初めての学校生活から戻つて来た日。

「お帰りなさいませ」

と礼をして、荷物を預かるために手を伸ばしたが、カーティスは鞆かばんを手渡すことなく、笑顔で、「ただいま」

と言つて通り過ぎた。

あれ？ 段取り、違つたつけ？

エデイスはすぐ後ろにいたデリックに視線で問いかけたが、ぶるぶると首を横に振っている。気が付けば、鞆を預かる手を出したままだった。別にデリックの荷物を預かる気はなかったのですねに手を引つ込めた。

「エデイス、行くよ」

カーティスに呼ばれて慌てて後を追ったが、ただ挨拶をして手ぶらでついて行くだけ。もしかしたらお出迎えの必要はないのではないか、とふと疑問に思った。

制服の上着を預かりながら、

「明日はお部屋でお待ちした方がよろしいでしょうか」

と聞くと、

「迎えに来てくれた方が嬉しいな。忙しいなら任せるけど」

そう言われると、お出迎えしない訳にはいかない。

荷物が多い時には小さな鞆や書類を渡され、時には街で買ったらしいお土産のお菓子やどこでもらった花束、寒い季節にはつけていた手袋やマフラーを渡されることはあったが、エデイスがいなくても運べる程度のものばかり。少なくとも荷物の運搬要員としては役に立っているとは思えず、主人を出迎える侍女の役割はエデイスには不要かつ無駄なものに思えてならなかった。



学校には他国からの留学生もいて、王族の子女であれば二人の王子がその世話役を担っていた。カーティスは休日に出かけることもあり、側近の三人のうちだれかがついていくことが多かったが、時にエデイスが同行することもあった。とは言っても後ろで控えるくらいで何か特別なことをする

訳ではなかったが、カーティスは聞かれたことにはさりと答え、それなりに相手の要望にも応じ、相手の国に賛辞を送りながらさりげなく自国を売り込むことを忘れない。王子たるもの、いい服を着ていいものを食べている分、ちゃんと働いていることに納得した。

王家所有の馬車は作りがよく、王都周辺の道はきちんと舗装されていることもあって、緩やかな振動が程良い眠気を誘い、時々帰りの馬車で居眠りしてしまうことがあった。客が同乗している時は必死にこらえるのだが、気が付けばこくり、こくりと舟をこぎ、カクンと倒れそうになって目が覚め、慌ててごまかしていた。しかし、

「エデイス、着いたぞ」

声をかけられてはっと目を開けると、カーティスの肩を借りて寝ていた時はあまりのことに飛び起き、馬車の天井に頭を打ち付けてしまった。

「も、申し訳ありません！」

自分の頭をなでながらひたすら平謝りしたが、カーティスからは、
「疲れてるんだろう。無理するな」

の一言で許してもらえた。

初めて会った時は同じくらいの背丈だったのに、いつの間にか肩の位置が高くなっていて、丁度いい枕になっていた。普段は同行する時でも数歩下がり、肩を並べるなどということはあり得ない。当然馬車の中だって……。

あれ？

ふと不思議に思い、エデイスはカーティスに尋ねた。

「向かい合って座っていたはずなのに、どうして隣にいらっしゃったんですか？」

「気持ちよさそうに寝てたから毛布を掛けようとしたら、急に馬車が揺れておまえが倒れてきたんだ」

なんと、従者である自分に毛布を。エデイスは恐縮してさらに深く頭を下げた。

「そ、それはありがたくも、申し訳ありませんでした。次からは遠慮なく起こしてください」

「……別に、肩を貸すくらい、何てことはない」

ぶっきらぼうに答えるカーティス。そうは言われても、主人を進行方向に背を向けて座らせ、自分もたれかかって爆睡しているなんて、侍女の風上にも置けない行為だ。

「次は、絶対に起こしてくださいね。絶対ですよ」

念押しするエデイスにカーティスは呆れた様子で、

「居眠りしないという気持ちはないんだな」

そう言われると、ぐうの音も出なかった。



非番の日、エデイスは久々に街に買い物に出かけた。

動物の出てくる絵本を見ていた時に、

「クレア様はどんな動物が好きですか？」

と聞いたところ、クレアは、

「ウサギ！」

と即答した。クレアの誕生日が近く、それならウサギの刺繡の入ったハンカチかブラッシング用のケープでもプレゼントしようかと思いつき、その材料を買いに来たのだ。

王都の家に母が使っていた刺繡の図案集があつたはず。買い物が終われば家に行こうと思つていたところ、精肉店の店先でモデルを見つけた。茶色と、黒茶のウサギが二匹、檻おかりに入れている。

丁度いい。持っていた紙の裏にラフなスケッチを描いていると、店主から、

「飼うなら持つて帰つてもいいぞ」

と言われた。

「畑を荒らしてたのを連れて来られたんだが、まだ小さ過ぎて食うところがないだろう。かわいがるもよし、育てて食うもよし。どうだ？」

クレアの誕生日に本物のウサギはどうだろう、とふと考えたものの、クレアは大喜びするだろうが、世話することになる侍女達が嫌がるに違いない。ウサギはかわいいがすぐに増えるし、畑を

荒らすものだ。それに生き物を安易に王城に持ち込むのはよくないだろうと思い、

「うーん、見るだけにしておきます」

と答えた。小さな子供達がウサギの周りに集まってきたので、エデイスはスケッチを切り上げて場所を譲り、手芸品を扱う店に移動した。

王女が使うとなると、ハンカチやケープであっても安物で済ます訳にはいかない。白か淡い色の布にしたいが、白い布に白い刺繍は子供には受けないだろう。黒や茶色のウサギも色としては地味だ。何かもう少し面白いものは……と思いながら店内を探していると、手触りのいい少し厚手の布が手頃な値段で売っていて、布を触っているうちにふとひらめいた。

ぬいぐるみでも作ってみようか。

抱っこするほど大きなものは難しいが、手に収まるくらい大きさならできなくもない。立体を作るのに型紙が欲しいところだが、昔父母に買ってもらったぬいぐるみが今でも家のどこかにあるはず。

布と、そろいの色の糸、目に使う黒いボタンを買いそろえて店を出ると、店の外には学校帰りの学生がたむろしていた。近くのカフェに入ろうと順番待ちをしているようだ。

エデイスはよけて通り抜けようとしたが、よそ見をしていた女子学生がぶつかってきた。それなのにエデイスの方からぶつかってきたかのように睨みつけ、

「何よ、邪魔ね、あなた」

と突っかかってきた。その態度に目と目を合わせると、

「あらやだ。誰かと思ったら……。ごきげんよう、エディス・スタンレー子爵令嬢」

そう言つて目を細めた令嬢は顔見知りだった。

レオナ・マクレガン伯爵令嬢。母親同士が知り合いで、何度かマクレガン家のパーティーに呼ばれたことがあったが、母がいなくなつてからは交流はなくなっている。家格も違い、張り合うようなものはないのに、事あるごとにライバル心をむき出しにしてくるので、あまり好きな相手ではなかった。

エディスは型通りの挨拶を返した。

「ごきげんよう、レオナ様」

レオナはエディスの平民と変わらない普段着を一通り観察した後、

「学校でお見かけしませんわね」

と言つてきた。この時間に制服を着ていない意味をわかつていて、あえて聞いているのだろう。

隠す必要もないので、

「学校へは行っていないので」

と答えると、

「あらまあ、それはお金にお困りだから、かしら？　大変ね。お気の毒様」

そんなことで勝ち誇ったような顔をされても困るのだが、それで気が済むならいいだろう、と黙って会釈をし、その場を離れようとしたところに、

「よかったら、一緒にお茶でもいいかが？」

と誘ってきた。口では誘いながら、目を見ればその気がないのは明らかだ。エデイスにしてもレオナとお茶をするくらいなら部屋で水を飲んでいる方がよっぽど有意義だ。

「いえ、遠慮しておきます」

断るエデイスに追い打ちをかけるように、

「お金の心配でしたら無用よ。私がお誘いしたんだもの。代金は払って差し上げますわ。……ああ、気詰まりかしら。ここにいるのはみんな王立学校の学生だもの。学校にも行けないあなたでは話題が合わないわね」

後ろで、取り巻きと思われる女子学生二人がくすくす笑っていた。どうせ笑うなら嘲笑とは違う笑い方だつてあるだろうに。類は友を呼ぶとはまさにこのことだ。

「伯爵様のお金を私ごときのためにお使いいただく必要はありません。遠慮させていただきますでは」

皮肉を向けられても顔色一つ変えず立ち去ろうとするエデイス。

レオナは昔からエデイスのことが気に入らなかつた。格下の子爵家の令嬢のくせに、伯爵令嬢の自分の機嫌を取ろうともしない。それどころか、一つ年上なのをいいことに自分に意見してきたこ

ともあった。学校にも行けない貧乏子爵家の令嬢なら、もつと後ろめたそうにしていればいいのに。侍女も連れずに一人で平気で街をうろつき、それを恥ずかしいとも思っていない。それでいて未だに貴族を名乗っていることさえ気に入らない。レオナはエディスに思い知らせてやりたくない、なお嫌味な言葉を放った。

「浪費家の親を持たなくてよかったわ。学校にも行っていないならお暇でしょう？　貴族令嬢なら別の形でお父上のお役に立つことだってできるでしょうに」

何を言われても気にしないでいようと思っていたエディスだが、その物言いには我慢できなかった。

振り返り、レオナの目を見据えると、

「父は浪費家ではありません」

と言い切った。

「父は自分のために借金をした訳ではありません。建て直した橋の幅を広げたことを贅沢だとも思われているのですが、それまでの交通量を考慮したものです。たとえスタンレー家が破産しても、領民には橋が残り、領を豊かにするはず。父の判断は正しいと信じています」

街を歩く平民とさほど変わらない服を着て、身を飾るものは何もつけていない。それなのに、エディスは貴族としての矜持きやうじを見せていた。

「融資と引き換えにした縁談もありました。貴族なら家を守ることを優先し、当然縁談を受けるで

しょうが、父は私にそれを強いませんでした。私を売る選択をしなかった父を、私は誇りに思っています」

小さく歯ざしりをして睨みつけてくるレオナに、エデイスは視線をそらすことなく対峙していた。カフェの入り口付近で、手を振っている学生がいた。どうやら席が空いたようだ。さつきまで一緒に笑っていた女子学生達が逃げるようにカフェの方に向かって行った。

店に入っていく学生達の近くにデリックの姿を見かけた。ということはあの集団の中にカーティスもいるのだろう。エデイスはこんな所でうっかりけんかを買ってしまった自分を反省し、少し長い瞬きをして息をつき、笑顔を作った。

「ご学友の方々と有意義な時間をお過ごしください。学校に行けるレオナ様を羨ましく思います」
あえて羨ましいという言葉を向けると、レオナの睨みつける視線が和らいだ。少しは気が晴れたようだ。ようやくこの場を離れられると思っていたところに、レオナの背後から人影が現れた。

「何をしている？」

「殿下！」

声をかけてきたカーティスをレオナは笑顔で迎え、礼をした。エデイスもすぐに礼をし、頭を下げたまま一歩下がった。

「知り合いを見かけたもので……」

レオナはカーティスが自分のそばに来たことに機嫌を良くし、より近くに歩み寄った。そしてエ

デイスにちらっと視線を向けると、得意げにカーティスを紹介してきた。

「こちら、カーティス殿下よ。語学研究会で一緒にいるの」

王子と知り合いであることを自慢したいのだろう。そう思ったエデイスは、黙って礼をした。それなのに、カーティスは、

「買い物か？」

とエデイスに話しかけてきた。ここで自分に話しかけてこなくても……。レオナに花を持たせ、自分のことはしらばっくれてほしかったのだが、そう思い通りにはいかなかった。

相手は自分が仕える主人だ。聞かれれば答えない訳にはいかない。

「はい。買い物を終え、家に帰るところです」

街で偶然会った王子と普通に話しているエデイスを見て、レオナは大きく目を見開いたまま固まっていた。

「それは何だ？」

カーティスに指さされた先を見ると、鞆に入れていたウサギのスケッチが半分飛び出していた。

「ああ、先ほど精肉店でウサギをスケッチしまして」

「に、に、にく……！」

精肉店でスケッチ、と聞いてレオナは悲鳴をあげて、数歩退いた。変な誤解をされたような気がしたが、あえて言い訳せず放っておいた。

「俺もそろそろ時間だ。一緒に帰ろう。ちょっと待ってろ」

エデイスが戻るのは王都にあるスタンレー家の屋敷なのに、何故一緒に帰ることに？ 何だかわからないうちに、カーティスは同行していた学生達の元に戻っていった。暇いとまを告げに行ったのだろう。

「あなた、殿下とお知り合いなの？」

落ちぶれ貴族が王子と面識があるなど全く予想もしてなかったのだろう。探るように聞いてきたレオナに、エデイスは事実をそのまま答えた。

「王城で、殿下の侍女をしています」

「じ、侍女？ 王子付きの？」

エデイスが頷くと、レオナは不満をにじませながらも、王家の使用人に過ぎないエデイスの立場に安心したようだ。

「なあんだ、そうだったのね。所詮……」

しかしカーティスが戻って来たのに気付くと、あえて追加の嫌味は控えた。

「レオナ嬢、すまないが私はこれで。みんなもレオナ嬢を待っているようだ」

「はい。それでは失礼します」

カーティスに促され、レオナは一礼すると学生達のいるカフェへと向かって行った。ようやく面倒な相手と離れられたことに安心したのも束の間、今度は非番なのに主人のお守りだ。

「家に戻るんだな。一緒に行こう」

「そんなに離れていないので、歩いて行きますが」

「じゃあ、そうしよう」

カーティスが手で合図をすると、デリックはいなくなった。馬車へ連絡に行つたのだろう。

どこの王子が街中で護衛もつけずに平民と変わらない格好の女と歩きたがるのか。しかし機嫌よくついてくるので、エデイスは諦めて歩みを進めた。肩を並べて歩ける立場ではないのに、今日はすぐ隣にいる。どうにも落ち着かず、少し下がろうと歩みを緩めるとカーティスも緩めるので、いつまでたつても下がれない。とうとう歩みが止まり、どうしたものか困っていると、

「どうした？ おまえの家まで案内してくれ」

確かにカーティスがエデイスの家を知っているはずもない。エデイスは道案内のため先導することにしたが、カーティスはぴったり隣にいる。距離が近い。これではまるで友達か恋人のようだ。

「父上を、尊敬してゐるんだな」

いきなりそう言われて、さっきの顛末^{てんまつ}を立ち聞きしていたのだと察した。どこから聞いていたんだろう。エデイスは横目でカーティスを睨んだ。

「もちろんです。殿下もそうではありませんか？」

「ここで殿下は避けてくれ。カーティスでいい」

「ご冗談でしょう？ 私はで……、あなたをお名前でお呼びできるような立場ではありません」

「街中でその肩書きを呼ばれる方がまずい」

それは確かにそうだ。エデイスは小さく頷いた。それなら、できるだけ呼びかけなければいいだけだ。

「エデイスの話を聞いて、スタンレー子爵のことを見直した。借金を抱える領にはいろいろと事情があるだろうが、確かにおまえを身売りして借金を何とかしようとはしなかったな」

「まあ、言われれば領のために嫁に行くくらいの覚悟はありましたけど。そうしろと言われなかったのは、私にとってはありがたいことでした」

貴族令嬢として家の役に立つ最も簡単な方法を父は取らなかった。レオナに言われたことで、エデイスは改めて父の自分への愛情を感じ、少しだけレオナに感謝した。

「母が言っていました。父は発想はいいけど、金銭感覚がちょっと緩い。橋のことも自分達の分に合った程度にしておけばと言う人もいます。でも私も兄も、父の考えは間違っていないと思っています。我が家がなくなっても、領民はそこで生き続ける。あの橋を広げたことは無駄じゃない。そう思うと、学校に行けなくても、侍女として働くことも、それほど苦ではないんです。……貧乏は嫌ですけど」

こんな話をしていてふと思ひ出した。

「機会があつたら、陛下にお礼を言っていただけですか？」
いきなりそう言われてカーティスは何のことかわからず、

「何を？」

と聞き返した。

「水害復興の助成金をいただき、ずいぶん助かりました。水害に遭った領に携わる一人として、お礼を言いたいです。お礼を言うにはちょっと時間が経ってしまってますが」

「……」

少しカーティスの反応が微妙だった。

「もしかして、陛下ではなく、どなたか文官の方の思い付きですか？」

「まあ、な」

カーティスの肯定にもエディスの笑顔は変わらなかった。

「思い付いてくださった方にも、それをお認めいただけたことにも感謝しています。陛下にも、その文官の方にも足を向けて寝られません。便乗できて助かりました」

「便乗？」

急にカーティスは足を止めて、訝^{いぶか}しげに、

「何故、そう思った？」

とエディスに問いかけた。

「助成金の話があったの、うちが被害に遭ってから二年近く経ってからだっただけでしょう？ あ頃は水害が続いてましたから、直近の水害でどこかの領に助成金を出そうと思いいったのではないで

しょうか。そのついででも前年に遡って申請を認めていただけて、本当にラッキーでした」

カーティスは頬を緩めて運の良さを語るエディスを見ながら、

「国政とは難しいものだな」

とつぶやいた。

その日、スタンレー家には子爵もエディスの兄であるアルバートも不在だった。

エディスは出てきたじいやに声をかけ、カーティスには応接室で待ってもらった。じいやがシヨック死しないか心配しつつ、一緒にいるのがカーティス王子であることを伝えたが、そこは年季の入ったじいやだけあって驚きはしてもうろたえることはなかった。

エディスは刺繍の図案集と、部屋の戸棚の片隅に置きっぱなしだったウサギのぬいぐるみを手に取り、すぐに戻るつもりだったが、ノックの音がして半開きになっていたドアを見ると、カーティスが立っていた。

「何してるんですか？」

「いや、子爵令嬢の部屋というのはどういうものか、興味があつて」

開いた扉から中を覗き込むカーティスに、何て失礼な奴だと思いつつも、見られて困るようなものもない。

「見るだけです。入っちゃダメですからね」

と言っているそばからカーティスは中に入って小さな部屋を見まわした。

王城の侍女に与えられている部屋よりは広いものの、壁紙は色褪せ、家具は長年使っているように見える。天蓋もないシンプルなベッド。飾り気のない部屋。戸棚に置かれているのは本と木箱、小さな人形、そして今エディスが手にしているウサギのぬいぐるみが置かれていただろう空間。机の上にはペン立てとインク、ガラスのペーパーウェイト、その横のハリネズミの形のブラシが愛嬌をふりまいているが、他は至ってシンプルだ。

想像とさほどかけ離れていない部屋に、カーティスは、

「へえ……」

とつぶやいただけだった。

「はいはい、もうおしまいです」

エディスはカーティスを押し出し、応接室に戻った。

あまり時間はないが、せっかくじいやが入れてくれたお茶が無駄にならないよう、まずエディスが先に飲んで毒見をした。家では出してもらった覚えがない、いいお茶だ。

エディスはじいやをじっと見ると、

「どこにこんないい茶葉が……」

とつぶやいたが、じいやは、

「ここぞという時のものを用意しておくのも、侍従の務めでございます」

と言つて、にっこりと笑つた。今は侍女をしている自分にとって、じいやは永遠に勝てない先輩だ。

迎への馬車が敷地内で待つていた。よその馬車の応対をするのはかなり久々だろうが、じいやは手慣れたものだつた。さつと扉を開けると深く礼をしたままの姿勢を保つ。カーティスが乗り込み、エディスは誰の手も借りずにその向かい側、デリックの隣に座つた。いつもじいやが扉を開けてくれた時とは違う作法に慣れている自分に気が付いた。

じいやはエディスに小さく頷き、笑みを見せた。それは侍女として頑張つてゐるエディスを励ましてくれているように見えた。

「お気を付けて。お嬢様をよろしくお願いいたします」
そう言つてじいやは深く礼をし、扉を閉めた。

カーティスはエディスが手にしているウサギのぬいぐるみが氣になっていた。

「わざわざそれを取りに戻つたのか？」

「クレア様のお誕生日に、ウサギのぬいぐるみを作つてみようかと。これをほどこせば型紙がとれるかと思ひまして」

「……ほどこのか？」